時事通信社 iJAMP
iJAMP記事

【クローズアップ】　◇輸出増へ手頃なワインを＝仲田道弘・山梨県観光部理事

18/01/10 08:30 NG024

仲田道弘・山梨県観光部理事

ワイナリー数、国産ブドウのみを使用した「日本ワイン」の生産量がともに全国１位の山梨県。近年は白の甲州ワインを英国に輸出するなど、海外に活路を見いだすワイナリーも増えつつある。県産ワインの振興に２５年以上携わっている仲田道弘観光部理事（なかだ・みちひろ＝５８）は「日常的に飲める手頃な価格帯のものを造っていかなくてはいけない」と、輸出促進のポイントを説明する。

一般的な甲州ワインの価格は２０００円前後。輸出には関税や輸送費が生じるため、海外市場で販売する際にはさらに値段が上がる。価格を引き下げるには、スケールメリットを生かすため、「ブドウをどれだけ増やせるかに懸かっている」という。

醸造用甲州種の年間生産量は平年で３２００トン。県は２０２５年度に３割増の４２００トンまで増産する目標を立てた。農家の高齢化なども考慮し「ワイナリーがブドウを作らなくてはいけない」と力説。「原料がなくなるとブランド力が下がり、マーケットに訴求できなくなる」と危機感を隠さない。

昨年７月に大枠合意した日本と欧州連合（ＥＵ）との経済連携協定（ＥＰＡ）では、ワインの関税が即時撤廃されることが決まり、ワイナリー関係者の間では歓迎する声もある。欧州へ売り込むハードルは確かに下がるが、仏ボルドーなどから品質の良い安価なワインが流入すると見込まれ、「特に赤ワインや（シャルドネなど）欧州系品種の日本ワインは苦戦する」と懸念する。

ＥＰＡ対策として、和食とセットで受け入れられつつある甲州を軸としながら、２０００円台のボルドーワインに対抗できる欧州系品種の赤ワインを造ることが重要という。約３０年前の山梨のワインは「高くてまずい土産用だった」が、ブドウの品質向上やさまざまな製法を採用したことが功を奏し、「この１０年間で品質が格段に上がった」と振り返る。

歴史が長く、醸造技術が確立していることなどから、山梨のワインは他道府県よりも優位性があると強調。昨年の「日本ワインコンクール」では、山梨のライバルとされる長野県のワインの金賞数が前年を大きく上回る七つに躍進したが、「山梨のワイナリーに刺激になっている」と歓迎の意向だ。

仲田理事は現在、明治時代の山梨のワイン造りにスポットを当てた歴史の本を執筆中。「歴史を知ることは未来への地図になる」と考えている。

（甲府支局・山田司）（了）（２０１８年１月１０日配信）

インタビュー一覧はこちら

山梨県（やまなしけん）自治体情報

人口	844,717人（2017年1月1日現在）
面積	4464.99平方キロ
首長	後藤 斎（ごとう ひとし）
住所	400-8501　山梨県甲府市丸の内1-6-1
電話番号	055-237-1111
URL	http://www.pref.yamanashi.jp/
決算額(歳入)	477,817,176千円（2015年度）
決算額(歳出)	461,461,367千円（2015年度）

※本印刷物は時事通信社 iJAMPサービスから印刷されました。

Copyright JIJI PRESS Ltd. All Rights Reserved.